

二人の若い紳士が、すっかりイギリスの兵隊のような恰好をして、
ぴかぴかする鉄砲をかついで、白熊のような犬を二匹ひきつれて、
だいぶ山奥の、木の葉のかさかさしたところを、こんなことを言いながら、歩いていました。

「一体全体、この山はけしからんね。鳥も獣も一匹もない。

なんでも構わないから、早くタンタアーンと、やってみたいなあ。

鹿の横っ腹なんぞに、二三発お見舞いできたら、ずいぶん痛快だろうねえ。

くるくるまわって、それからどたっと倒れるだろうねえ。」

それはだいぶの山奥でした。

案内してきた専門の鉄砲打ちも、迷って、どこかへ行ってしまったくらいの山奥でした。

それに、あんまり山がおそろしいので、

その白熊のような犬が、二匹一緒にめまいを起こして、

しばらくうなって、それから泡を吐いて死んでしまいました。

「ぼくは、二千四百円の損害だ」と一人の紳士が、その犬のまぶたを、ちょっとかえしてみ
て言いました。

「ぼくは二千八百円の損害だ。」と、もう一人が、悔しそうに、頭を曲げて言いました。

はじめの紳士は、すこし顔色を悪くして、

じっと、もう一人の紳士の顔つきを見ながら言いました。

「ぼくはもう戻ろうと思う。」

「ぼくも寒くなったし腹は空いてきたし、戻ろうと思う。」

「それじゃ、これで切り上げよう。」

なあに、戻りに、昨日の宿屋で、山鳥を十円で買って帰ればいい。」

「うさぎもでていたねえ。そうすれば結局おんなじこった。じゃあ帰ろうじゃないか」

ところが困ったことに、どっちへ行けば戻れるのか、いっこうに見当がつかなくなっていま
した。

風がどうと吹いてきて、草はざわざわ、

木の葉はかさかさ、木はごんごんと鳴りました。

「どうも腹が空いた。さっきから横っ腹が痛くてたまらないんだ。」

「ぼくもそうだ。もうあんまり歩きたくないな。」

「歩きたくないよ。ああ困ったなあ、何か食べたいなあ。」

「食べたいなあ。」

二人の紳士は、ざわざわ鳴るすすきの中で、こんなことを言いました。

その時ふとうしろを見ると、立派な一軒の西洋造りの家がありました。

そして玄関には

RESTAURANT

西洋料理店

WILDCAT HOUSE

山猫軒（やまねこけん）

という札がでていました。

「ちょうどいい。ここはこれでなかなか開けてるんだ。入ろうじゃないか」

「おや、こんなところにおかしいね。」

しかしとにかく何か食事ができるんだろう」

「もちろんできるさ。看板にそう書いてあるじゃないか」

「入ろうじゃないか。ぼくはもう何か食べたくて倒れそうなんだ。」

二人は玄関に立ちました。

玄関は白い瀬戸のれんがで組んで、実に立派なもんです。

そしてガラスの開き戸があって、そこに金文字でこう書いてありました。

「どなたもどうかお入りください。決してご遠慮はありません。」

二人はそこで、よろこんで言いました。

「こいつはどうだ、やっぱり世の中はうまくできてるねえ、

今日一日苦労したけれど、今度はこんないいこともある。

このうちは料理店なのに、ただでご馳走するんだって。」

「どうもそうらしい。決してご遠慮はありませんというのはその意味だ。」

二人は戸を押して、中へ入りました。

そこはすぐ廊下になっていました。

その硝子戸の裏側には、金文字でこうなっていました。

「ことに太ったお方や若いお方は、大歓迎いたします」

二人は大歓迎というので、もう大喜びです。

「ぼくらは大歓迎されているんだ。」

「ぼくらは両方兼ねてるから。」

ずんずん廊下を進んで行くと、

今度は水色のペンキで塗られた扉がありました。

「どうも変な家だ。どうしてこんなにたくさん戸があるのだろう。」

「これはロシア式だ。寒いとこや山の中はみんなこうさ。」

そして二人はその扉をあけようとする、

上に黄色い字でこう書いてありました。

「当軒は注文の多い料理店ですからどうかそこはご承知ください」

「なかなかはやってるんだ。こんな山の中で。」

「そりゃそうだ。見たまえ、東京の大きな料理屋だって大通りには少ないだろう」

二人は言いながら、その扉をあけました。

するとその裏側に、

「注文はずいぶん多いでしょうがどうかこらえて下さい。」

「これは一体全体どういうことだ。」

ひとりの紳士は顔をしかめました。

「うん、これはきっと注文があまり多くて支度が手間取るけれどもごめん下さいということだ。」

「そうだろう。早くどこか部屋の中に入りたいな。」

「そしてテーブルに座りたいな。」

ところがまた扉が一つありました。

そしてそのわきに鏡がかかって、

その下には長い柄のついたブラシが置いてあったのです。

扉には赤い字で、

「お客さまがた、ここで髪をきちんとして、それから履物の泥を落してください。」

と書いてありました。

「これはもっともだ。

僕もさっき玄関で、山の中だと思って見くびったんだよ」

「作法の厳しい家だ。

きっとよほどえらい人たちが、たびたび来るんだ。」

そこで二人は、きれいに髪をとかして、靴の泥を落しました。

そしたら、どうです。ブラシを板の上に置くやいなや、

それがぼうっとかすんで無くなって、

風がどうっと部屋の中に入ってきました。

二人はびっくりして、たがいによりそって、

扉をがたんと開けて、次の部屋へ入って行きました。

早く何か温かいものでも食べて、元気をつけておかないと、

もう途方もないことになってしまうと、二人とも思ったのでした。

扉の内側に、また変なことが書いてありました。

「鉄砲と弾丸をここへ置いてください。」

見るとすぐ横に黒い台がありました。

「なるほど、鉄砲を持ってものを食うのは行儀が悪い。」

「いや、よほど偉いひとが来ているんだ。」

二人は鉄砲をはずし、帯皮を解いて、それを台の上に置きました。

また黒い扉がありました。

「どうか帽子とオーバーコートと靴をおとり下さい。」

「どうだ、とるか。」

「仕方ない、とろう。」

たしかによっぽどえらいひとなんだ。奥に来ているのは」

二人は帽子とオーバーコートを釘にかけ、

靴をぬいでぺたぺたあるいて扉の中に入りました。

扉の裏側には、

「ネクタイピン、カフスポタン、眼鏡、財布、その他金物類、

ことに尖（と）がったものは、みんなここに置いてください」

と書いてありました。

扉のすぐ横には黒塗りの立派な金庫も、ちゃんと口を開けて置いてありました。

鍵まで添えてあったのです。

「ははあ、何かの料理に電気をつかうと見えるね。」

金属のものはあぶない。

ことに尖ったものはあぶないということだろう。」

「そうだろう。」

こうして見ると勘定は帰りにここで払うのだろうか。」

「どうもそうらしい。」

「そうだ。きっと。」

二人は眼鏡をはずしたり、カフスポタンをとったり、

みんな金庫の中に入れて、ぱちんと錠をかけました。

少し行くとまた扉があって、

その前に硝子の壺が一つありました。

扉にこう書いてありました。

「壺の中のクリームを顔や手足にすっかり塗ってください。」

見るとたしかに壺の中のものは牛乳のクリームでした。

「クリームを塗れというのはどういうことだ。」

「これはね、外がひじょうに寒いだろう。

部屋の中があんまり暖いと

ひびが切れるから、その予防なんだ。

どうも奥には、よほどえらいひとが来ている。

こんなところで、案外ぼくらは、貴族とちかづきになるかもしれないよ。」

二人は壺のクリームを、顔に塗って、手に塗って、

それから靴下をぬいで足に塗りました。

それでもまだ残っていましたが、

それは二人ともこっそり顔へ塗るふりをしながら食べました。

それから大急ぎで扉をあけると、その裏側には、

「クリームをよく塗りましたか、耳にもよく塗りましたか」

と書いてあって、ちいさなクリーム壺がここにも置いてありました。

「そうそう、ぼくは耳には塗らなかった。

あぶなく耳にひびを切らすとこだった。

ここの主人はじつに用意周到だね。」

「ああ、細かいとこまでよく気がつくよ。

ところでぼくは早く何か食べたいんだが、

どこまでも廊下じゃ仕方がないね。」

するとすぐその前に次の戸がありました。

「料理はもうすぐできます。

十五分とお待たせはいたしません。

すぐ食べられます。

早くあなたの頭に瓶の中の香水をよく振りかけてください。」

そして戸の前には金ピカの香水の瓶が置いてありました。

二人はその香水を、頭へぱちやぱちや振りかけました。

ところがその香水は、どうも酔のような匂いがするのです。

「この香水はへんに酔くさい。どうしたんだろう。」

「まちがえたんだ。下女が風邪でも引いてまちがえて入れたんだ。」

二人は扉をあけて中に入りました。

扉の裏側には、大きな字でこう書いてありました。

「いろいろ注文が多くてうるさかったでしょう。

お気の毒でした。

もうこれだけです。

どうかからだ中に、壺の中の塩をたくさんよくもみ込んでください。」

なるほど立派な青い瀬戸の塩壺は置いてありましたが、

今度という今度は二人ともぎょっとして

お互いにクリームをたくさん塗った顔を見合わせました。

「どうもおかしいぜ。」

「ぼくもおかしいと思う。」

「たくさんの注文というのは、向こうがこっちへ注文してるんだよ。

だからさ、西洋料理店というのは、ぼくの考えるところでは、

西洋料理を、来た人に食べさせるのではなくて、

来た人を西洋料理にして、食べてやるうちということなんだ。

これは、その、つ、つ、つ、つまり、ぼ、ぼ、ぼくらが……。」

がたがたがたがた、ふるえだしてもうものが言えませんでした。

「にげ……。」

がたがたしながら一人の紳士はうしろの戸を押そうとしましたが、

どうです、戸はもう一分も動きませんでした。

奥の方にはまだ一枚扉があって、大きなかぎ穴が二つつき、

銀色のフォークとナイフの形が切りだしてあって、

「いや、わざわざご苦労です。

大へん結構にできました。

さあさあ、おなかにお入りください。」

と書いてありました。

おまけにかぎ穴からはきよろきよろ二つの青い眼玉がこっちをのぞいています。

「うわあ。」がたがたがたがた。

「うわあ。」がたがたがたがた。

ふたりは泣き出しました。

すると戸の中では、こそこそこんなことを言っています。

「だめだよ。もう気がついたよ。塩をもみこまないんだよ。」

「あたりまえさ。親分の書きようがまずいんだ。

あそこへ、いろいろ注文が多くてうるさかったでしょう、

お気の毒でしたなんて、間抜けたことを書いたもんだ。」

「どっちでもいいよ。

どうせぼくらには、骨も分けてくれやしないんだ。」

「それはそうだ。けれどももしここへあいつらが入ってこなかったら、それはぼくらの責任だぜ。」

「呼ぼうか、呼ぼう。おい、お客さん方、早くいらっしやい。いらっしやい。いらっしやい。

「へい、いらっしやい、いらっしやい。それともサラダはお嫌いですか。

そんならこれから火を起こしてフライにしてあげましょうか。

とにかくはやくいらっしやい。」

二人はあんまり心を痛めたために、

顔がまるでくしゃくしゃの紙屑のようになり、

お互いにその顔を見合わせ、

ふるふるふるえ、声もなく泣きました。

中ではふっふっとわらってまた叫んでいます。

「いらっしやい、いらっしやい。

そんなに泣いてはせっかくのクリームが流れるじゃありませんか。

へい、ただいま。じきもってまいります。さあ、早くいらっしやい。」

「早くいらっしやい。

親方がもうナフキンをかけて、

ナイフを持って、舌なめずりして、

お客さま方を待っています。」

二人は泣いて泣いて泣いて泣いて泣きました。

そのときうしろからいきなり、

「わん、わん、ぐわあ。」という声がして、

あの白熊のような犬が二匹、扉をつきやぶって

部屋の中に飛び込んできました。

鍵穴の眼玉はたちまちなくなり、

犬どもはうとうとなってしばらく部屋の中をくるくるまわっていましたが、

また一声「わん。」と高く吠えて、いきなり次の扉に飛びつきました。

戸はがたりとひらき、犬どもは吸い込まれるように飛んで行きました。

その扉の向こうのまっくらやみのなかで、

「にゃあお、くわあ、ごろごろ。」という声がして、それからがさがさ鳴りました。

部屋はけむりのように消え、

二人は寒さにふるふるふるえて、草の中に立っていました。

見ると、上着や靴や財布やネクタイピンは、

あっちの枝にぶらさがったり、こっちの根もとにちらばったりしています。

風がどうと吹いてきて、草はざわざわ、

木の葉はかさかさ、木はごんごんと鳴りました。

犬がふうとうなって戻ってきました。

そしてうしろからは、「旦那あ、旦那あ、」と叫ぶものがあります。

二人はにわかになんかついて

「おい、おい、ここだぞ、早く来い。」と叫びました。

みの帽子をかぶった専門の猟師が、草をざわざわ分けてやってきました。

そこで二人はやっと安心しました。

そして猟師のもってきただんごを食べ、

途中で十円で山鳥を買って

東京に帰りました。

しかし、さっき一ぺん紙くずのようになった二人の顔だけは、

東京に帰っても、

お湯にはいっても、

もう元通りになおりませんでした。